主日礼拝４月１８日（日）
題　『手とわき腹の傷跡』
テキスト：ヨハネによる福音書２０章：１９～２３節

今週はヨハネによる福音書の主イエスの復活された場面を共に学びたいと思います。ちなみにヨハネによる福音は、９０年代にまとめられたと言われています。それまでには、マルコ、マタイ、ルカという３つの福音書はすでに存在していました。
よみがえりのイエスが弟子たちに現れる場面です。
19:その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。
「その日」というのは、ヨハネによる福音書によれば、イエスさまが死よりよみがえり墓に来ていたマグダラのマリアに表れたその日のことです。
現在で言えば、日曜日の夕方のことになります。弟子たちは一つの所に集まっていたようです。彼らはユダヤ人を恐れていました。イエスを捕まえて、十字架につけたユダヤ人権力者たちが、今度は自分たちも捕まえに来るのではないかと思い、不安になっていたのです。そこで留まっていた家の戸に鍵をかけて隠れていたのです。
これは当然のことのように思えます。わたしでも、わたしたちでも
そのような目に合えば、恐ろしくなり胸が恐怖感に潰れそうになるのではないでしょうか。不思議なことに、そこに、弟子たちがいる場所にイエスが来て彼らの真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われたのです。
「平和があるように」とは、「平和を持って来る。もたらす。」とか「平和を与える」ということです。
よみがえられたイエスさまは、弟子たちを「わたしの友と呼ばれ」愛されました。その弟子たちのところに平安を届けに来てくださったのです。「平安・平和」とは、ユダヤの言葉、ヘブライ語では「シャローム」という言葉です。現在でも使われ、平和・平安であり、日常的に、「おはよう」とか「こんにちは」としても使用されます。
自分を十字架に見殺しにした弟子たち責めるわけでも、文句を言うわけでもなく、怯える弟子たちに「平和があるように」と伝えるために来てくださったのです。ここには驚きと共に、深いイエスさまの愛を思います。
ところで漢字で「遍在」（へんざい）という言葉を聞かれたことがありますか。意味は、「いつでもどこでも存在すること」です。イエスさまの復活の姿は、肉

の束縛から解放され、でも見えるかたちで、片寄ってあるのではなく、世界中広くあちこちにゆきわたって存在することができるのです。神の遍在、キリストの遍在という神学用語もあります。この偏在の語源はラテン語の「ユビキタス」で、現在のコンピューター時代をユビキタス時代の到来とか言われていました。どこにいてもパソコンやスマホでネットワークが世界中に広がっている。つながっているということを表すようです。人の子として、

パレスティナ、現在のイスラエルの地で３３歳まで生きられたイエスさまは、神さまの全き愛を人々に伝え、十字架につけられます。そしてよみがえられたイエスさまは、神の子として、パソコンやスマホよりも先に、世界中で悲しむ者、苦しむ者の、不安や恐れで怯える者たちのそばにしてくだる方なのです。いつまでも、世が終わるまで、永遠に共にいてくださるのだと聖書では証言されています。

わたしはそれを信じます。みなさまは、どうでしょうか。共に信じましょう。信じる時、希望としての主イエスの力が心に注がれ、喜びと生きる力が与えられ、沸き上ります。まさに、信じる者は救われる、と言うイエスさまの言葉が実現して行くのです。

「平和があるように」と言われた後、イエスさまは

「 20 節：手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。」　ここで、弟子たちはイエスさまを気づいて喜んだのです。これはすばらしいことでした。しかし、ここで、はたと目がとまる言葉があります。　「手とわき腹とをお見せになった。」という言葉です。

手には、ゴルゴタの丘で十字架の木にかけられた時に、釘で打たれた跡があったのです。わき腹には、槍でさされた傷跡があったのです。

わたしは、この聖書の個所を今まで何度も何度も読んで来て、知ってはいましたが、今回この言葉が目から胸に突き刺さって来るようでした。

復活された、よみがえられたイエスさま、神さまによって死から起き上がらされ、立ち上がらされたイエスさまの体には十字架で受けた傷跡あった。「傷跡があった。」これは過去形ですが、傷跡は今もある、現在形としてあるのではないだろうかと、思わされました。つまり、よみがえらされたイエスさまは、今も十字架についておられる、と受け止めるのです。それは今も、わたしたちの人間の苦しみや罪を担っておられると思えるのです。イエスさまの受けられた傷跡は消えることはないけれども、その傷と傷跡が、人を癒すのです。苦しみの中、困難の中を生かしてくれるのです。

今を生きる私たち、世界中の人々の心を癒してくださるのです。これこそが神の恵みそのものです。

マタイによる福音書１１章２９節「疲れた者、重荷を負う者は、誰でもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。」と今も呼びかけ、招き続けてくだっているのです。

主イエスは、弟子たちに続けて語りかけられました。

21:イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父が
わたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」

22:そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けな
さい。聖霊とは、今も風のように働きかける神さまの力です。弟子たちは、よみがえられたイエスさまから聖霊、新たなる命の息を吹きかけられ、思いも新たにされ、遣わされた者たちとなって行きました。わたしたちも遣わされた者たちなのです。

ここでは、「罪の赦し」の使命が弟子たちに託されました。家族や仲間内、共同体内、教会内のことだと思われます。

23:だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪
でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

「23:だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。」

「赦される」とは罪から解放されることと言われます。わたしたちが、誰かの罪を赦せば、その人は罪から解放されるというのです。

しかし、「あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

「赦さなければ」とは、「解放されない、しばられる。留め置かれる」

その人も、わたしたちも「解放されない、しばられる。留め置かれる」と。」その人もわたしたちの心も解放されることが必要なのです。それは十字架のイエスさまの愛、聖霊の注ぎによって可能となったのです。

イエスさまが教えてくださった「主の祈り」のことばを思い出します・

「わたしたちの罪をおゆるしください。わたしたちも人をゆるします。

わたしたちの負い目をおゆるしください。わたしたちも負い目をゆるしあいます。」　イエスさまは、すでに弟子たちを赦してくだったのです。

そのことを受けとめて弟子たち私たちは、この世を生きていくのです。

自分の力でできることではありません。しかし、絶望するなかれ、主イエスさまが赦しを解放の道を与えてくださるのです。それが希望です。

この世に遣わされたわたしたちの働きと共に神さまと主イエスが共にいてくださって必要を満たし守り続けくださるのです。

主イエスが共にいてくださる時、わたしたには自分の思いを遥かに超えてイエスさまの力を受けてできることがあるのだということを信じて歩みたいと願います。

◆イエス、弟子たちに現れる

19:その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。

20:そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。

21:イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」

22:そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。

23:だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」